

2015年度教師海外研修(エルサルバドル) 研修報告書

学校名	三重県桑名市立久米小学校	氏名	駒谷 奈津
-----	--------------	----	-------

1. 現地研修に対する各自の目的 とその達成度

(特に、現地研修の経験を生かす授業実践に資することについて)

昨年の夏、フィリピンからの双子の転校生が私のクラスにやってきた。今年度は、海外から帰国した児童と、外国をルーツにする児童を受け持っている。

私は、日本の学校なのだから、日本の生活になじまなければ彼女達、彼達のためにならないと考えていた。しかし、「日本なんて嫌い。」と言った子どもの一言で自分の視野の狭さに気付かせてもらった。

そこで、彼らのように、外から日本を見てみたいと思った。観光ではなく、他国を深く知ることで自分が漠然と捉えていた世界から日本を見、考えて課題を明確にしたいと思った。だから、この研修に参加をした。

参加をして、自分の思考の狭さや思い込みにハッとさせられた。自分の見方、考え方が変わる体験だった。この研修に参加した意味が大いにあったと思う。そんな気づきを子どもと共に見つけていきたい。

2. 訪問国から学んだこと (気づいたこと、わかったこと、大切に思ったことなど)

(1) 柱1「訪問国に肯定的に出会う」という観点から

エルサルバドルは、全く知らない、遠い国だった。だから、どんな国なのか楽しみにしていた。

しかし、調べれば調べるほど、マイナスのイメージが膨らんできた。殺人率の高さ、情報の少なさ、治安の悪さ……。実際にエルサルバドルの人に会うまで怖い国というイメージは拭う事が出来なかった。

実際に会ったり話したりする内に、マイナスイメージは頭の隅に追いやられていった。エルサルバドルが段々と身近な国になっていった。特に子ども達との出会いで、自分が教師である喜びをしみじみと実感した。子ども達の目はキラキラとしていて、どの国も子どもは同じだとうれしくなった。

帰国し、コーヒーショップへ行く度に豆の産地を確認する。コーヒーが主な産業のエルサルバドル、その名を探すために、産地「その他」と書かれた中にエルサルバドルがあるのかな、そんな話を職場の同僚としているとエルサルバドルがどんなに遠い国に思えなくなっていった。

(2) 柱2「日本と訪問国とのつながりや同一性を理解する」という観点から

エルサルバドルの教育省を訪問した際、全日制の学校を担当するロランド・マリン氏からお話を伺った。様々な話題が出る中、印象に残った一言がある。それは、「学校へ行かないのではなく、行けないのです。」という一言だ。エルサルバドルでは貧しい家庭のために働いたり、地域に学校が無いなどの事情により教育が行き渡らないという課題がある。日本では小・中学生が就労したり、学校そのものが無いから行けないという事例は稀だが、学校に行きたくても行けない子は存在する。

私が思う訪問国との同一性は、教育の機会均等が重要である、ということだ。ロランド氏は、教育によって救われる子もいるし、国の未来のために今、教育を大切にしたい、という熱い思いを語ってくださった。教育に携わる身として非常に感銘を受けた。教育の重み、学ぶ意義、学校の存在。全ての子どもの「学びたい」が実現する社会を創る一員でありたいと思う。

(3) 柱3「共通の課題について共に考え・共に越える」という観点から

エルサルバドルで感じた事、それは日本のように何事もきっちり決められていない事である。様々な事に「大丈夫かな。」と思ったが、結果、問題は無かった。

日本は世界的にみても、計画が緻密でありルールが徹底している。物事は滞りなく進むが、皆が守り、同一の行動をするという前提があり、窮屈さを感じる。

エルサルバドルのゆるやかさは、心のゆとりである。時間通り、ルール通りに動くことに慣れている私にとって初めは戸惑ったが、日本に必要な考え方もかもしれないと思うようになった。逆に日本の時間管理システムは窮屈に思え、加えて忙しさもあるのだけど、やるべきことをやりきる達成感を得やすい。この考え方はエルサルバドルに必要な考え方かなと思う。

この一例が示すように、共に考えるということは、どちらの課題も良さも知り、お互いの考え方を認め合える関係を作ることだと思う。どちらか一方が正しい事は無い。人と人が対話をし、考えをわかった上で何ができるかを実践していくことが共に超える事につながるのではないだろうか。

3. JICAの国際協力事業の「良い!と思ったところ」と「今後あるといいなと思う視点」

今回の研修でJICAのボランティア事業を見学し、現地で活躍する青年海外協力隊に出会うことができた。現地の方々と対話をし、その地に合った形でモデルケースを展開していく取り組みを見せていただいた。

青年海外協力隊の、それぞれに様々なきっかけで海外へ出、困難や課題にぶつかりながらも全力でがんばっている姿は、私の生き方の参考にもなった。そして、その姿を見て自分たちも変わろうとしているカウンターパート（現地での同僚）の姿も印象に残った。つまり、JICAの支援によって人々の意識をゆるやかに変える、これが私の考える良い点である。

今回の研修中に出会った青年海外協力隊にじっくりインタビューができた事は、教材としても、私の国際理解教育の考え方を広げるという意味でも大変有意義な時間だった。私達の要望を実現させるため、ファシリテートして下さったスタッフの皆様には大変感謝をしている。また、通訳のみどりさんが行う移動車中でのミニ講座もたくさんの情報を得る事ができ、充実した研修になった。

4. 訪問先ごとの「感じたこと」や「学んだこと」

※別掲

5. 印象に残る写真2点とその解説

●写真1… [ETE_0982]

◇キャプション：習字の授業に興味津々！

◇解説文：子どもって興味のあることにはものすごくいい笑顔をしますよね。どの国でもいっしょだなあ〜って感じた一枚です。



●写真2… [ETE_0997]

◇キャプション：子どものいない学校

◇解説文：滞在中に、ギャング団の活動が活発化してきて、登校できなくなりました。治安の悪化を伝える一枚。教室に子どもがいないことほど、教師として悲しいことはありません。



6. 来年度参加する先生へのアドバイス（持ち物、必要な準備、学びの視点、注意事項など）

- ①日本からのちょっとしたお土産は、扇子が被ったりしたので、絵葉書とか、粉末スティックのお茶とか、箸（中米の人はかんざしみたいに頭に付ける人も多いので一本でもいいと思います。）などもよかったなあ、と思いました。運転手さんや、案内をしてくれる人などにちょっとあげるといいと思います。
- ②子ども達との交流ですが、意外にあやとりは良かったです。すごく簡単な技で何度も遊んでいました。見本で見せる技は、結構難しい技のほうが受けます。
- ③グループで意見をまとめなければならぬことが多く、難しさを感じました。
- ④お土産（大）ですが、せめて政府機関に行く時は中味を吟味した方がいいなあと思いました。順番に割り振ってしまったので。
- ⑤体調は崩します。食べたくない日は非常食に頼った方が私は管理ができました。フリーズドライの食べ物は6食くらいあるといいです。お箸とかフォークなどは持っていくといいです。
- ⑥冷房がききすぎてとても寒かったので、はおれる物は常に必要かと思います。

7. その他全般を通じての感想・意見など

たくさんの人、もの、情報との出会いを通して、心を揺さぶられ、物事への価値観、他人の捉え方などが変化したと感じている。また、「隣の人」「周りの人」「いろんな国の人」「自分と違う考えの人」との違いを楽しみ、共に生きるとは何かを深く考えるようになった。

エルサルバドルは情報だけを見ると危険な国に思う。しかし、その国で生きている人は家族を大切に、この国の行く末を案じ、国をよりよくしようと努力している人がたくさんいた。

また、日本がこの国の手伝いをしている事、この国でがんばる日本人達を誇りに思った。同時に、日本の課題も整理できたように思う。

今、私にできる事は、この研修でまなんだ事を周りの人々に発信し、知ってもらおう事である。小さな即席かもしれないが、自分にできる精いっぱいやり続けていきたい。

以上